

## オンラインでの特別活動論の授業実践とその課題

樋口大夢

### 1. はじめに

2021年度前期の授業は、全ての授業をオンライン形態で行った2020年度前期とは異なり、1回目から3回目までの授業は原則として対面形態<sup>(1)</sup>で、4回目以降は対面形態とZoom Video Communications, Inc.が提供するウェブ会議サービスZoomを使用するオンライン形態を両立させた「ハイブリッド型」<sup>(2)</sup>で行われた。本稿は、この2021年度前期に実施された特別活動論の授業を記録するとともに、「ハイブリッド型」の授業に関連するいくつかの論点及び今後の課題を示すことを目的とする。なお、同じく2021年度前期に授業者が担当した教育学概論B（教育制度）と教育史の授業実践にも適宜触れながら論を進めていく<sup>(3)</sup>。

先述したように、2021年度前期の授業形態は、学期中に対面形態から「ハイブリッド型」への切り替えを強いられた。今後しばらくは全面的な対面形態での授業実施が困難であると予測されるため、2021年度前期に行われた授業についての記録は、今後の授業実践や大学教育の在り方を考える際の有効な手がかりとなることが期待される。

以上を踏まえて、本稿では、2021年度前期に行った特別活動論の授業実践を以下3つの観点から記録したい。第一に授業の実施形態について述べる（2）。第二に学生の受講環境について簡単に確認する（3）。第三に特別活動論の授業全体から見いだされるいくつかの論点と課題について記す。その際、授業の12回目から14回目にかけて行

った「ハイブリッド型」での模擬授業についても検討を加える（4）。

### 2. 授業の実施形態について

まず、2021年度前期に行われた特別活動論の授業がいかなる形態で実施されたのかを簡単に振り返る。当初、2021年度前期の授業は、全て対面形態で実施することが想定されていた。そのため、特別活動論（及び教育学概論B（教育制度）、教育史）のシラバスも、新型コロナウイルスの感染状況が悪化した場合に備えて「ハイブリッド型」や録画した授業映像を配信するいわゆる「オンデマンド型」で行う可能性を残しながらも、基本的には対面形態を前提にしていた。以下は、特別活動論のシラバスから各回の授業テーマを抜粋したものである。

- 1回目 ガイダンスとグループ分け
- 2回目 特別活動の理念と歴史
- 3回目 特別活動の特質・目標・内容
- 4回目 特別活動と教育課程
- 5回目 特別活動と評価
- 6回目 特別活動と生徒指導
- 7回目 特別活動と教科教育
- 8回目 特別活動と道德教育
- 9回目 特別活動と総合的な学習の時間
- 10回目 特別活動における外部との連携
- 11回目 事例検討（学級活動・ホームルーム活動）と模擬授業①

- 12回目 事例検討（児童会・生徒会活動）と模擬授業②  
 13回目 事例検討（クラブ活動と部活動）と模擬授業③  
 14回目 事例検討（学校行事）と模擬授業④  
 15回目 まとめと試験

冒頭で示したように、3回目までの授業は当初の想定通り対面形態で行われたが、東京をはじめとした新型コロナウイルスの感染者増加に伴い、4回目以降の授業は「ハイブリッド型」で実施されることとなった。「ハイブリッド型」の授業では、毎回の授業において個々の学生自身が受講形態——授業を対面形態で受講するのか、オンライン形態で受講するのか——を選択することが認められていた。前期ではこうした「ハイブリッド型」の授業形態が、15回目の授業が終わるまで継続した。本稿は、「ハイブリッド型」の授業形態に関する考察に主眼を置くため、以下では基本的に4回目以降の授業に焦点を当てたい。尚、12回目から14回目に企画していた学生による模擬授業は、授業形態の変更によって大きな影響を受けることとなったが、この点については4節で改めて詳細に検討する。

まずは、授業の構成について確認する。授業は全体として大きく二つの柱から構成されていた。一つは授業者自身による講義形式の内容であり、もう一つはその内容を踏まえたグループワークなど学生が主体的に取り組む内容である。「ハイブリッド型」の授業では、授業内における教員と学生、学生と学生間のコミュニケーションが、対面形態及びオンライン形態の双方において為された。また、学生同士のグループワークでは、対面で受講している学生にもそれぞれZoomにアクセスしてもらい、「ブレイクアウトセッション」機能を用いて、受講学生全員をいくつかのグループに振り分けて活動を行った。

次に授業資料について確認する。授業資料は、当日の内容に則したものをパワーポイントで作成した。資料の提示方法は、教室ではそのパワーポイントのスライドをプロジェクターで投影し、オンライン上ではZoomの画面共有機能で同じものを画面上に表示して行った。また、配布方法は、対面形態で授業を受けている学生には印刷したものを配布し、オンライン形態で授業を受けている学生には事前にWebClassを通じて配布した。模擬授業実施日は、学生が作成した資料を授業者が集約し、同様の仕方で配布した。

学生には毎回の授業で小レポート（こちらで提示した課題や授業に対するコメント）を課し、授業後に取組んでもらい、WebClassを通じて提出してもらった。

授業中に学生から出された質問については、対面でのコミュニケーションやZoomのチャット機能により回答した。また、コンピューターのトラブルでZoomを起動することができないという可能性も考慮し、常時、大学のメールアドレス等を使ったコミュニケーションツールも解放しておいた。授業時間外の質問については基本的にWebClassのレポート機能で受け付け、次の授業の冒頭に可能な範囲で応答した。

### 3. 学生の受講環境

本節では、対面形態で授業を受けている学生に着目することを通じて、学生の受講環境について気になる点を挙げたい。「ブレイクアウトセッション」を用いたグループワークに教室内で取り組んでいる学生の様子からは、学生たちが非対面形態の授業を受ける際の環境がわずかではあるが透けて見えてくる。

まず、利用している機器に関してである。教室で受講している学生は、ノートパソコンやタブレット端末、スマートフォンを利用していた。その

場で簡単な聞き取りを行ったところ、自宅をはじめとした教室以外の場所でオンライン形態の授業を受けるときにも同じ機器を利用していると答える学生が多かった。また、通信環境について確認すると、ブロードバンド回線やWi-Fiルーターを利用している学生もいれば、携帯電話会社の回線を利用している学生もいた。

ここで注目すべきは、携帯会社の回線を利用したスマートフォンで授業を受けている学生が少なからずいるという事実である。特別活動論の履修者の中にも、通信制限により授業途中でZoomに接続ができなくなり、その旨を同じ授業を履修している友人伝いで連絡してきた学生がいた。これは一例に過ぎないが、こうした学生の状況に鑑みると授業を受講する際の学生のインターネット環境については改善の余地があるように思われる。

それでは、こうした受講環境で学生が授業に参加する特別活動論の授業はどのようにして実施されたのか。次節では、2021年度前期特別活動論の授業を行う中で見えてきた論点や課題について考えていきたい。

#### 4. 授業から見えてきたいくつかの論点と課題

本節では、前節までの状況を踏まえて、2021年度前期特別活動論の授業を行う中で見えてきたいくつかの論点について確認していきたい。特に、①授業資料作り、②授業デザイン、③模擬授業について記述し、そこから見いだされる課題について若干の考察を加えていきたい。

##### 4.1 資料作りから見えてきたこと

まず、資料作りから振り返っていく。とりわけ、資料作りで意識した点は3節で述べた学生の受講環境である。

授業で使用したパワーポイントのスライドは、

学生がスマートフォンで受講することを考慮し、文字の大きさは概ね28pt以上とした。強調する場合は文字の色を変えたりフォントを大きくしたりした。こうした対応への是非については判断が分かれるところもあるかもしれないが、6月初頭に行った授業評価アンケートにおける学生の回答を見る限り問題がなかったように思われる。

ただし、配布資料については課題があった。配布資料は、A4用紙の片面にパワーポイントのスライド20枚程度を掲載したものである。対面形態で授業を受けている学生はそれを印刷して配布し、オンライン形態で授業を受けている学生は事前にWebClassに掲げていた同資料を各自でダウンロードしてもらった。

前出の授業評価アンケートにおいて、この配布資料を拡大してほしいという声が上がった。そのため、対面形態で授業を受ける学生に配布する資料は、A4版からA3版に拡大した。しかし、WebClassに掲載する資料は、A4のままであった。その後、オンライン形態で授業を受ける学生からも資料拡大の要望があり、それまでの資料に加え、A4用紙にスライド6枚を掲載した資料をアップロードした（過去の授業分についても同じ対応をとった）。この対応に対してWebClassのレポート機能に寄せられた学生の反応は、好意的なものが多かった。

「ハイブリッド型」を含めオンラインを利用する授業は、パワーポイント等を使用する際にどの程度の文字情報を記載するかという問題点を胚胎しているように思われる。2020年度前期に城西大学で教育史及び教育学概論B（教育制度）を担当した桑嶋晋平は次のように自身の授業で使用した資料について述べる。

オンライン〔形態の〕授業でパワーポイントなどのプレゼンテーションソフトを使用する場合、文字情報をどの程度のせるかという問

題があるようにおもわれた。パワーポイントなどを使用する場合、最低限の情報をのせておき、口頭で補足することが一般的であろう。けれども、オンライン〔形態の〕授業の場合、たとえば通信の問題などで音声途切れる場合があるだろう〔桑嶋2021:15〔 〕内引用者〕。

桑嶋はこうした状況に鑑みてスライドにある程度の文字情報を記載するという対応策をとり、配布資料である程度の「授業のながれや話していることをしめすことが重要になる」と述べていた〔桑嶋2021:15〕。

この桑嶋の指摘を受けて2021年度前期の特別活動論（及び教育学概論B（教育制度）、教育史）では、「ハイブリッド型」の授業形態ということも意識して、文字情報を多めにしたスライド作成を心掛けた。こうした取り組みに対しては、2020年度の桑嶋の授業と同様に〔cf. 桑嶋2021:15〕、2021年度も学生の意見は分かれたが、授業の中で学生に上記の趣旨を説明すると、多くの学生は理解を示してくれた。オンライン形態が含まれる授業では、配布資料の大きさや情報量など、その在り方を今後も模索する必要があるように思われる。

#### 4.2 授業デザインから見てきたこと

次に授業デザインについて振り返る。もちろん、毎回の授業全てを同じ流れで進めてきた訳ではないが、各回の授業は概ね次の図1のような流れで進行した。

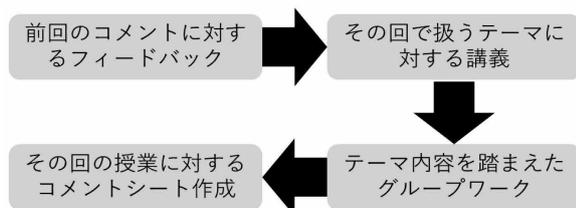


図1 一回の授業の大まかな流れ

こうした一回の授業の流れは、基本的にどのような授業形態でも大きく変わることはない。そのため、対面形態のみで行った1回目から3回目の授業でもこの流れに基づいて授業を進めた。

しかし、こうした流れで授業を行っていく中で対面形態のみの授業やオンライン形態のみの授業（オンデマンド配信や同時配信型を含む）とは異なる、「ハイブリッド型」だからこそその課題も見えてきた。その課題とは、対面形態で参加している学生とオンライン形態で参加している学生が混ざったグループワークに見て取ることができる。

対面形態で授業を受けている学生は、感染予防のための適度な距離をとりながらグループワークを行った。このとき、対面形態で授業を受けている学生の多くは、同じグループのメンバーを教室内で見つけた場合近くに集まってグループワークに取り組んだ。そのため、対面形態で授業を受けている学生は、オンラインを介すことなく直接的なコミュニケーションをとることができ、授業者にはグループワークがスムーズに進行しているように見えた。

しかし、このことは、同じグループに振り分けられたオンライン形態で授業を受ける学生にとっては好ましい状況ではなかった。というのも、グループワークにおいて、オンライン形態で授業を受けている学生は、対面形態で授業を受けている学生同士のスムーズなコミュニケーションから取り残され、そのコミュニケーションの場へコミットする困難さを抱えていた。実際、対面形態で授業を受けている学生とオンライン形態で授業を受けている学生を分けたグループ作成を望む学生の声もあった。

この声を受けた後に行ったグループワークでは、対面形態で授業を受けている学生とオンライン形態で授業を受けている学生を分けて行った。その結果、授業者にはそれぞれのグループで盛んなコミュニケーションが展開されたように感じら

れた。授業を受けている学生たちからもスムーズでやりやすかったという感想を聞くことができた。

以上を踏まえたとき、「ハイブリッド型」でグループワークを行うには、対面形態で授業を受けている学生とオンライン形態で授業を受けている学生を分けてグループ作成するなど、そのやり方を工夫する必要がある。

### 4.3 模擬授業から見えてきたこと

最後に模擬授業について振り返りたい。2節で示したように、12回目から14回目までの3回の授業は学生による模擬授業を行った。通常の授業が「ハイブリッド型」で行われたことに伴って学生には、オンデマンド型のような授業動画を作成してもらうのではなく、学級活動をテーマとしたZoomによる双方向型の模擬授業を実施してもらった。

Zoomを利用した模擬授業を企図した理由は、学校現場でZoomを利用した学級活動としての朝の会や学校行事などが実施されていたからである<sup>(4)</sup>。こうした学校現場の状況を考えたとき、Zoomを使用した模擬授業は、学校教員を志す学生にとって有意義な経験となることが期待される。

模擬授業は、受講学生数の都合上、グループで行った。学生は初回の授業時に6つのグループに振り分けられ、それらのグループ毎に授業内・外の時間を使って模擬授業に向けた準備（授業内容の考案、指導案の作成、授業資料の作成など）を進めた。模擬授業実施日は、準備してきたものに基づいた模擬授業（20分）、その後の授業検討会（20分）を2サイクル行った。模擬授業が終わった学生には、課題として模擬授業に関する振り返りを課した。

模擬授業当日は、教師役グループの学生は大学の教室に集まってZoomを配信し、生徒役の学生

は教室以外の場所からZoomに接続した。学生が模擬授業で取り扱ったテーマは、キャリア教育にかかわるものからクラスづくりにかかわるものまで多岐にわたった。また、学生は、Zoomのブレイクアウトセッションやホワイトボード機能、GoogleDocumentを使うなど、オンライン環境を生かした模擬授業を行っていた。

一方、学生がオンライン環境に苦戦している様子も見られた。一定数の学生は、各教科教育法の授業などで対面の模擬授業を既に経験していた。しかし、教師役の学生は、生徒役の学生全員が画面オフにしている状態で授業するというオンライン特有の状況に困惑し、戸惑いながら模擬授業を行っていた。模擬授業に関する振り返りの中で一定数の学生が、生徒役の顔が見えない状態で授業をすることに対して困難さを感じていたと記載していた。模擬授業を通じて多くの学生は、対面形態の授業とは異なるオンライン形態の授業に固有の難しさを経験していたように思われる。

また、オンライン形態で行った模擬授業の内容を対面形態でも実施したいという感想を振り返りに記載した学生も一定数いた。新型コロナウイルスの感染状況にもよるが、同じ内容の模擬授業を対面形態とオンライン形態の両方で学生が経験することは、彼らの学びを深める有意義な取組みのように思われる。手さぐり状態で始めたオンライン形態での模擬授業は、今後もやり方などを探究し続ける必要があるだろう。

## 5. おわりに

これまで2021年度前期特別活動論の授業について、記録を残すとともに課題を述べてきた。「ハイブリッド型」授業の適切なやり方が分からない中、多くの学生からの授業に対する意見に助けられた。学生の十分な学びの場を確保するために、授業では本稿で述べてきたことをはじめとし

た様々な取り組みを行ってきた。

しかし、未だ課題が多いのも現状である。例えば、「ハイブリッド型」の授業におけるグループワークの在り方についてなどを挙げるができる。こうした点については稿を改めて検討することにしたい。

#### 注

- (1) 新型コロナウイルス感染症の影響により一部学生については、自宅からオンライン形態で授業を受けることが認められていた。
- (2) 本稿では、特別活動論、教育学概論B（教育制度）及び教育史で採用した、教室で受講する対面形態の授業とZoomを用いて同時配信の映像を教室外で観て受講するオンライン形態の授業を両立させた形態のことを「ハイブリッド型」と呼ぶことにする。
- (3) 2021年度前期に担当した全ての授業は、途中で授業形態が変わったこともあり、毎回試行錯誤しながら授業を行ってきた。当然、不備も多かったが、あたたかい受講生に支えられ、規定回数の授業を無事に終えることができた。受講生には、この場を借りて改めて感謝申し上げる。
- (4) 例えば、静岡聖光学院中・高（静岡市）では、文化祭をオンライン上で開催している。詳しくは、同校のホームページを参照。<https://www.new-normal-ssof2021.com/>（2022/1/24 最終閲覧）。

#### 参考文献

- 桑嶋晋平（2021）「オンラインでの教育史の授業実践とその課題」『城西大学教職課程センター紀要』5，pp.13-18.